

哲學研究

第百五十號

第十三卷
第九冊

方法概念の分析

戸坂 潤

第三部

方法の問題は實踐的課題である。吾々が學問を——今は問題を學問の範圍に限つてゐる——實際的に、即ち單なる關心なき一つの既成の存在としてゐはなく、吾々自身が現實的に交渉を有たうと欲する處の一つの營みとして、遂行しようとする時、始めて方法の問題は發生する。このやうな動機から發生しないこの同じ問題は、實は眞面目に相手にされるだけの誠實を有つものではないであらう。たとひそれを論じる論調と論構とがどれ程莊重であらうとも、尤もらしさを眞實から區別する必要に常々逼られてゐる人々にとつては、之は一つの虚偽に外ならないかも知れない。

方法の問題は實踐的動機に於て成り立つからして、この問題に於て始めて正當に問題となり得る方法概念は又、實踐的動機を内に含んでゐなければならぬはずである。單に方法とは何であるかに就いての理論的な説明に於てさへ、實際吾々がすでに見たやうに、方法と對象との存在論的交渉として、實踐的動機が現はれなければならなかつた。

この實踐的動機は、方法が何であるかといふ理論的説明から、必然的に、如何にして方法を求めるかといふ實踐的説明を呼び起こさなければならぬ。といふのは吾々がこの動機を溯る時、之が必然であるのである。

併し「如何にして」の問ひはこの場合、夫々の學問の内容に立ち入つた考察である外はない。といふ意味は個々の學問が、その研究の、その概念構成の、その世界形象の方法を自分自身によつて決定する外はないのである。方法概念の分析を目的としてゐる吾々は、無論、これ等特殊學問の夫々の成果と計畫と傾向とを手懸りとして、方法概念に肉を與へ、それによつて分析をより具體的にすることは出来る。けれども之を實際に遂行しようとならば、それはとりも直さず夫々の學問の研究を遂行することゝ一つであるであらう。吾々は方法概念の分析といふ課題と、學問研究といふ課

題とを、課題としては區別しなければならぬ。さうすれば私は方法に就いて「如何にして」の問ひを、正當な權利を以て一應回避することが出来る筈である。もし之を回避せずに強ひて取り上げるならば、吾々の云ふべき言葉は、至極普遍的な従つて又甚だ抽象的な、幾つかの格率であるであらう。方法は對象に個有であるやうに求めよ、方法は普遍的であるやうに擇べ、方法は手法を襲踏せずして批判的であるやうに求めよ、等々。これらの格率は形式的な道德的格率がさうあるやうに義しく又高貴なものには違ひない、けれども現實に對して事實上何かの力を有たないならば——たとひ有つべきにしても——之は無用な容喙に過ぎないであらう。*——吾々は之を通り越して、より根本的に動機を溯つて見なければならぬ。

*論理學に於ける研究法や統制法が、之を産み出した必然性を離れて(例へばベークンの精神を離れて)已に興へられた既成のものとして理解される時、このやうな批難が或ひは當て候まるであらう。ベークン自身にとつては、その研究法(*inventandi*)は新しきものゝ發見を使命としてゐる。

學問に於ける方法概念の動機——それは實踐的である——の最も根本的な源は、

學問に於て方法が何故求められねばならないか、にある。方法が何であるかとか、如何にして求められるかではなくして、何故に求められねばならないかである。無論學問に於て方法が何かの理由によつて必要であればこそ方法が實踐的に要求されるのである筈であるが、その理由は何か、この問ひに向つて、この動機の溯源が吾々を導いて來る。そして之に對する答へは一應すでに明らかである。學問はその對象を研究するためには是非とも方法によらなければならぬ、方法とは對象に到る途であつた。言葉を換へて云ふならば、學問が學問であらうためには是非とも方法を求めなければならぬ。そして學問——それは普通知識又は學殖と考へられる——が學問であらうための、その威嚴が要求する處のものを云ひ表はすもの、之を吾々は一應學問から區別して、特に學問性又は或る人々に從へば科學性といふ概念を以て呼ぶことが出来る。學問性とはそのやうな要求を云ひ現はし従つてその限りこの要求によつて要求される必要なるものゝ成立の動機となることが出来る概念である。(常に概念は動機づけられたものであると同時に要求されたものである。この意味に於て概念は常に理念であるといふことが出来る。)そして學問性といふ概念理念のもつこの要求によつて必要とされ、この動機によつて動機づけられたもの

が、正に方法概念なのである。故に方法概念成立の實踐的動機は正に學問性の概念に在らねばならない。方法概念の分析は、根本に於て(即ちその實踐的動機に於て)學問性概念の分析であるのである。——之が吾々の方法概念分析の課題の最後の形態となるであらう。

吾々は今學問が何であるかを直接の問題にしようとは思はない、さうではなくして、學問から一應區別されたる、學問をして學問であらしめる處の、學問の在り方(*Wie es anheißt*)——學問性だけを分析して見れば充分である。であるから例へば、學問は諸の概念の分類と結合とであるといふやうな立ち入つた説明は今の吾々の問題には直接に關はりを持たない。*又學問が何を求め何を研究するかといふこと、例へばそれは事物の原因、原理を研究する、といふやうな主張も之を顧みる必要はさし當りない。*吾々の必要とする處のものは、このやうな原因、このやうな原理が、どういふ條件に於て求められ研究される點に於て、その追求なり研究なりが學問的となるかの、その條件なのである。そして學問性が何であるかはおのづから學問が何であるかをも明らかにする出發であるのである。

*ブラトンは學問(ディアレクタイケ)を處々に於ては、このやうに述べてゐる。

その代表的なものはソピステース 253D。

※アリストテレースの學問は原因と原理との追求に外ならない「形而上學」(982a)。

さて學問性は例へば第一に知覺されるといふことを條件とするものではない、何となれば學問性は少くとも物の異同を辨ずる働きを内に含まなければならぬであらうが、之を辨ずるものは知覺に個有な夫々の感官であることは出來ない。凡そ吾々が物に就いてその異同を辨じ之によつて或る意見——尤も常識的ではあるが——を有つことは個々の感官の働きではなくして心の働きでなければならぬであらう。そこで心の働きである意見(ドクサ)は學問性の條件となることが出來るか。虚偽なる意見は之に耐へることが出來ない、たゞ正しき意見だけが之に耐へ得るやうに見える。併し正しき意見は直ちに眞の知識を齎すことは出來ない、人々は自ら見たことのないものに就いて、たゞ他の人々から聞き教へられた處に基いて、一つの意見を而も正しき意見を有つことが出來るであらう、けれどもその正しき意見が眞の知識であることが保證されてゐるとは限らない。そして學問性は無論眞の知識の性質でなければならぬであらう。學問性の條件は單に正しき意見ではなくして、その意見が何故正しいかを語り説明することが出來るのを必要とする。それは

今や、ロゴスによる説明し得る正しき意見であるやうに見える。^{*}但し説明とはこの場合、理由(ロゴス)を語ることを指す。

^{*}プラトンの「テアイテトス」は續いて、説明し得る正しき意見もまだ眞の知識と云ふことが出来ないことを述べる。けれども私は茲に止ることを有利と考へる、何となればプラトンに於てと異つて、眞の知識ではなくして學問性が吾々の問題であるのであるから。

私は今得た結果から假に二つのさし當り不必要な規定を除くことが便利である。第一は知識に關する規定である。何となれば知識(又學殖)は向に、學問性の概念へではなくして學問といふ概念へ歸着し又は結び附く概念であると考へられたのであつて、吾々は今之とは一應區別された學問性の規定を求めてゐたのであるからである。それ故この知識を規定する處の意見といふ規定はまづ第一に除かれることが好ましい。第二に眞理に關する規定である。何となれば吾々は學問性の分析を進めて行つた結果に於て始めてこの概念に出逢ふことがあるにしても、——そしてそれは必然的であるであらう——、始めからこの概念との交渉を決定しておく必要はないからである。それ故この眞理概念に屬する正しさの規定も亦省かれねばなら

ない。かくて今さし當り學問性の規定として殘されるものは説明し得るといふ夫れである。この規定がアリストテレスの「形而上學」の始めに於て指摘されてゐる處の、教へ得るといふ學問性の規定と直接に關聯し得ることを吾々は見逃すことが出来ない。

教へ得る(従つて又學び得る)といふ學問性の規定——教導性——は様々に解釋出来るであらう。吾々少くとも二つの場合を區別することが出来ると思ふ。學問が學問である以上或る人が築き上げた學問は他の或る人によつて傳承されることが出来る、といふのがその一つである。といふのは、成る程他人の業績をそのまゝ無批判に受けることはどの學問の場合にも許されないが、併しそれが學問性を有つ以上他人のその勞作を一つ一つ實地に繰り返さなくても、自分にとつて信賴すべき確實な遺産としてそれを所有することが出来、又は他の見方に於て、他人の功績或ひは失敗を再び繰り返す無用を節約することが出来、従つてこれを基礎として自分の研究を進めることが出来る筈である、といふのが第一の場合である。茲にあるものは傳習の可能性である。——之を傳承性と呼ぶことゝしよう。之に對して第二は、學問が學問である以上、まだその學問の語る理論に到達してゐない處の人々(尤もあまり

にそれから距たつてゐるものは別として、之をして、之に通達せしめる通路を示して之を誘導し得る筈である、といふ場合である。こゝにある問題は素養ある他人が之に附いて來ることが出来るか否か、即ち異議と曖昧に出逢はずに歩むことが出来るか否かである——之を誘導性と呼ぼう。傳承性と誘導性とのこの二つの場合は決して同じではないであらう。何となれば前者の意味に於て教へ得るものが必ず又後者の意味に於ても教へ得るものであるとしても、その逆が必ず成り立つとは限らないからである。この意味に於て例へば、哲學は學び得ない、といふ言葉は意味を有つと考へられる。何となれば、哲學は誘導され得るが併し傳承され得ない、といふ關係を、その言葉は語らうとしてゐるのだからである。傳承性としての教導性と誘導性としての夫れとは一應かくして區別されることが出来る。(そして後者は前者よりも一般的であることが同時に明らかとなつた。そこで學問性のもつ教導性として、場合によつては、誘導性のみを理解しても差問えがないであらう。)併し人々はかう云ふかも知れない、このやうな意味で——誘導性といふ意味で——教へ得るといふ性質は學問に個有であるのではない、藝術(繪畫でさへ)も或る意味に於て、そして無論第一の意味で、はなくして第二の意味の内に於て、教へ得られるではないか、と。

いふのはどのやうな藝術も觀照者をしてその作品そのものゝ理解にまで通達せしめる通路を用意するのを怠ることは許されないのであつて、この通路に或る意味に於ける異議と曖昧——それは無論學問の場合の夫とは異なる——とが横つてゐるのであつては、その作品はそれだけその完成を缺いてゐると考へられねばならないからである。そこで吾々はそのやうな故障をとり除くために、恰も向の説明し得る——ロ、プ、スによる理由を與へ得る——といふ規定を思ひ出す必要がある。學問性の有つ教導性は言葉によつて説明し理由を與へ得るといふそれではなければならぬ、之に反して例へば藝術の教導性は決してそのやうな説明を與へるものであつてはならない筈であらう。そしてアリストテレスによれば、教へ得るといふことはたゞ聞き得るといふ條件に於てのみ結果するのである。聞き得るとはこの場合無論言葉をであつて單なる音をではない。故に教へ得るとは今の場合さきの意味に於ける説明し得るといふことに外ならないのである。芥子が眠りを梟が賢さを何かの意味に於て説明するとは云つても何よりも先にそれは言葉による説明ではない、詩の言葉は亦説明するものである筈はない、そして神話の言葉も亦説話ではあるにしても多くはまだ説明ではない、——説明は理由を語ることであつた、そして神話は

多く理由の代りに傳説を語るものだからである。^{*}併し吾々は何も、教へ得る説明し得る)といふ規定を以て學問性を定義しようとするのではない、云ひ換へるならばこの規定によつて學問性を規定し盡さうとするのではない。そのやうなことは不可能であるであらう。たゞ吾々はこの性質を以て學問性の最初の一つの規定としよう云ふまでゝある。であるから、たとひこの規定が學問性全體を蔽ふのでなくとも、少くともこの規定が學問以外のものに屬しないことが明らかとなるならば充分なのである。さてこのやうな意味に於て、そしてたゞ今云つた意味に於てのみ、學問性はまづ第一に教へ得ること、教導性である。

^{*}傳説と理由とを近づける時、神話性と學問性とは見分け難くなる。そして實際そのやうな場合を吾々はプラトシに於て、特にテイマイオスに於て、有つ。蓋し様々な意味に於て、神話は學問と密接な關係にあるであらう。

學問性の有つ教導性は、學問の有つ公共性の一つの保證の外ではない。何となれば、教導性とはたとへば學問の教育を説くために指摘された規定であるのではなくして、實は學問が學問であるためには個人的人格の内面性を踏み越えることが出來

なければならぬといふ學問の公共性を説くために採用された規定であらうからである。事實學問に於ては特に、獨り好がりを入々は最も惡むであらう。公共性を有たない或る人の理論的勞作はたとひその人によつてどのやうに價值高く空想されようとも、それであるからと云つて學問性を有つことが出来るのではない、従つてそれは嚴正な意味に於ける學問の名に値ひすることは出来ないと考へられる。今、公共性とは普遍的通用を意味する、併しそれは學問が事實に於て法則上必ず通用し、又は統計上概して通用し、或ひは又公算上恐らく通用するであらうといふのではない。さうではなくして原則に於て普遍的に通用する筈のものであり、又普遍的に通用して然るべき資格を有つものであることを、それは意味する。學問性を有つが故に却つて事實上普遍的に通用せず、學問性を缺くが故に始めて事實上一般に學問らしいものとして通用し得るやうな、そのやうな學問の或る場合を人々は知るであらう。さてこのやうな原理的な——單に事實的なものとは異なる——公共性を人々は普遍妥當性と呼んでゐる。そしてそのやうな人々は又之を以て學問性の規定と見做してゐる。故に吾々が、教導性は所謂普遍妥當性の古典的な云ひ表はし方に相當する處の一面を有つと云ふ時、この言葉は許されるであらう。かくて學問性は普遍

妥當性として——但し無論向に規定した通りの教導性に相當する學問に個有な普遍妥當性として——一層確實に規定されることが出来る。

學問性が普遍妥當性であるといふ言葉は恐らく人々が好んで或ひは安んじて用ゐてゐる處のものであらう。學問性が普遍妥當性であるから、それであるから——その人達はこの時すでにかう推論することのみを用意してゐる——學問性は當爲であり規範であり眞理價值である。併し普遍妥當性の概念をこのやうに形式的に——この概念が單に概念としてもつ概念性だけに注意しながらその概念が更に事態としてもつ事態性を忘れて——取り扱ふ前に、吾々はそれよりも先にどのやうな普遍妥當性が普遍妥當性と呼ばれてゐるのかを見る必要があるのである。何が普遍妥當性といふ概念であるかよりも先に、普遍妥當性と云ふ概念は如何なる事態を指してゐるのかを見る必要がある。之を怠る時折角の普遍妥當性も内容を願ないといふ意味に於て形式的概念に過ぎなくなつて了ふ。そして實際人々はこのやうな形式主義に陥つてゐることが少くないであらう。といふのは往々にして人々は、普遍妥當性が現實に何となつて現はれてゐるかを願はずしてこの概念に安んじてゐる場合が多いからである。處で吾々の普遍妥當性は形式的概念である

ことに安んじない、それは現實的内容を持つべきである、——但し、この現實的内容とは向のかの事實上の普遍妥當ではない、原理的な概念の現實的内容は又依然として原理的でなければならぬ。教導性が恰も夫れであつた。故に所謂普遍妥當性は一つの形式的な夫れであり、たゞ教導性のみが内容的な普遍妥當性概念であるのである。故に今や云ふことが出来る、學問性とは内容的な普遍妥當性概念としての教導性に外ならない、と。

處が更に、教導性——内容的普遍妥當性——は、學問性のまだ抽象的な規定に過ぎないことを注意しなければならぬ。尤もそれが學問性を完全に規定し盡し得ないからと云つてさう云ふのではない。さうではなくして寧ろ教導性概念それ自身の立場から云つてこの規定が抽象的なのである。といふのは教導性の概念は別に如何にして教導性を獲得するかといふそれ自身に就いての顧慮を含んだ概念ではないからである。凡そ或る概念を分析する場合、それが觀念的にもつ規定ばかりではなく、又それが現實的實踐的にもつ規定をも指摘せねばならぬとすれば、學問性の概念——それが今は教導性であつた——に於ても亦、この教導性概念は學問性の(即ち又教導性自身)觀念的規定のみを指摘するに過ぎないと云ふのである。何故さ

う考へられるかを私は他の概念を借りて明らかにしよう。法概念は人々が常に絶對的にそれに服従すべき筈の規定を持つものと思はれる。もし人々が之に服従しないと假定するならばもはやその概念が成り立たないやうなそのやうな概念で法はあるのである。之は無論之だけとして何の誤りも含みはしないであらう。之が法概念の觀念的規定である。處が吾々はこのやうな自然法的な概念に對して又、法の歴史的概念を持つてゐる。歴史的な法概念に對しては觀念的な法概念は必ずしも自分の規定をそのまま強制することは出来ないと考へねばならぬ理由がある。却つて何かの非合法的な行爲を俟つて——而も法の正義の概念それ自身の名に於て——法が歴史的に變革して來たことは事實である。であるから法に對して實踐的に取引きをしよう——それが法の歴史を成す——とする時、事實人々は法の觀念的規定だけからは多くを期待出来ないであらう。法の觀念的規定はすでに成立せるものとしての、又はその成立の如何を問題にしない理念としての、法を説明することは出来る。併し別に、如何にして或る法を獲得すべきかといふ——而も法概念それ自身に就いての——實踐への顧慮を含んだ規定ではないのであるから。このやうにして法概念に於て觀念的規定と實踐的規定との對立を分析することが出来る

と思はれる。そして觀念的規定は實踐への特殊の顧慮をその内に含まない點に於て抽象的であるのである。概念分析の一例として擧げた上の場合はそのまゝ教導性の概念にも當て簾らなければならぬ。教導性は學問性が何であるかを説明する、そしてその説明はそれだけとしては正しい。けれどもこの概念は別に如何にしてその概念自身を實踐的に實現するか——如何にして教導性を獲得するか——といふことに關する顧慮を含んだ規定では決してない。教導性はそれ故學問性の觀念的規定に外ならない、それは従つてこの意味に於て抽象的規定に過ぎないのである。學問性の(又教導性の)現實的規定——それは實踐への顧慮を計上した規定である——として吾々は何を持つてゐるか。

それに先立つて一つの説明を挿むに好い機會である。學問性を單に教導性又は普遍妥當性として理解すること——學問性の觀念的規定を主張すること——は、それ自身に於て正しい、それは今説明された。處がそれに止るといふことはこの正しい出發をしながらもやがて誤つた歸結を導き入れる結果となるであらう。學問が吾々の實踐に關はることなくして何か觀念的に規定し盡され得る存在であるかのやうな主張をそれは歸結しないとも限らない。その時これは學問性の實踐的規

定を排斥することに外ならない。處がこの實踐的規定の排斥と觀念的規定の主張とは全く別である。後者は現實性の單なる缺乏 (Privatum) である、之に反して前者は現實性の否定である。後者の抽象性は具體性への進展を拒みはしない——それであればこそ吾々は學問性の分析に於て安んじて之を通過することが出來たのである。然るに前者の抽象性はこの進展を拒んで安住を、逃避と籠城とを欲する。兩者はそれであるのに往々にして混同され易いのを人々は知つてゐるであらう。*

* プラグマチズムが既成の眞理概念——普遍妥當性がその代表的なものである——に對して與へる攻撃は恰もこの混同に對するものとして解釋される時、始めて正當に理解出来る。眞理が例へば普遍妥當性であるといふ或る範圍の論理主義者の主張を、實は誰も非難しようとするのではないであらう。たゞプラグマチズムはそのやうな論理主義者が往々にして安住と逃避と籠城との動機に従つて語つてゐるのを見破つてゐるに外ならない。

さて學問性の現實的實踐的規定を求めることが今の吾々の要求となつた。そして元來吾々は方法概念から學問性概念への推移の動機として已にこの實踐性を持

つたのであつた。

學問性——それは今迄の處教導性である——が誘導性と傳承性とに區別されたのを思ひ出さう。前者は一定の學問が自分への通路を人々に與へてこれを誘導し得るといふ學問性の規定であり、後者は一定の學問が人々に傳承され研究の基礎となることが出來るといふ學問性の規定であつた。そこで問題は、このやうな二つの規定——それはまだ抽象的、觀念的な規定であつた——に相當する具體的、實踐的な規定は何であるかである。といふのは取りも直さすかうである、一方に於て如何にすれば、誘導的となり得かといふ説明を含んだ一つの新しい學問性概念を、他方に於て如何にすれば、傳承的となり得るかといふ説明を含んだ一つの夫れを、求めることである。そして一方に於てそれは手續の概念であり、他方に於てそれは成果の概念であるであらう。何となれば手續を経て誘導することによつて學問の誘導は實際され、成果を傳承することによつて學問の傳承は實際的となるからである。然るに人々は學問に於て、この手續を方法と呼び、この成果を體系と名づけてゐる。故に方法と體系こそが、求められた學問性のかの新しい規定に外ならない。——かくて吾々は學問性の視野に於て、再び方法概念を取り上げ、之を體系概念に對せしめて見

直すことゝなる。

嘗つて學問の性格を云ひ表はすものとして、方法は對象に對立した。今や學問性の規定として、それは體系に對立する。單に學問の性格を云ひ表はすと云はれるに止らずして、方法は又體系は今や更に學問性そのものゝ規定である。といふのは、學問性は今や一方に於て方法であり、他方に於て體系である。かくて學問は一方に於て方法として——手續として——他方に於て體系として——成果として——成立する。學問の學問性は一方に於ては方法によつて、他方に於ては體系によつて、始めて保證されるのである。今や學問性の分析を借りることによつて、方法概念は自身の根柢に向つて云はゞ垂直に運動して行つたのを人々は見ないであらうか。これは嘗つて方法が對象に向つて行つた運動とは明らかに區別されなければならぬ運動——恐らく落着又は上昇——である。前の場合の云はゞ水平運動に對して之は云はゞ垂直運動であるであらう。そしてこの垂直軸の新しい一點を原點とする水平面に現はれるものが體系概念に外ならない。この新しい水平面に於てこの二つの概念の運動を吾々は今見よう。*

*方法と對象との關係が最もよく意識されるのは科學に就いての場合である。

之れに反して方法と體系との關係が問題となるのは重に哲學——もし之れを科學から區別することを許すならば——においてあることを注意しておかう。

人々が茲で方法と呼ぶ處のものは手續であつた、そして手續は誘導性の實行を説明する概念であつた。誘導性とは理論の連續に於て異議と曖昧とに出會はぬことを意味した。この意味に於て理論的に無理なきこと——併し之は習俗的な尤もらしさから嚴重に區別されねばならぬ——を意味した。そして間隙又は飛躍の無いこと従つて緻密であることは、たゞこの意味に於てのみ誘導性を保證するのである。それ故人々は今や云ふことが出来る、學問性は緻密なる——但し今の意味に於て緻密なる——方法(手續)によつて始めて保證されるのである。事實人々は或る理論が妥當であるか否か——即ち學問性を有つか否か——を見るのに、まづその方法(手續)が緻密であるか否かを檢べるのを常とするであらう。全く始めから誘導的であることを心がけない理論は無論のこと、たとひさうあることを心がけたものであつてもまだ充分に緻密でない理論は、それだけ學問性を低く價值されるのが常であるであらう。かくて方法(手續)の概念は第一に或る理論が緻密であるか無いかを云ひ

表はす。繰り返して云はう、異議と曖昧とに出會ふことなくして或る理論を追跡することが出来るか否か、——誘導性を有つか否か——、之を示すものが方法(手續)の概念でまづあるのである。

處が方法(手續)の緻密さの概念は單に誘導性のみの緻密ばかりを云ひ表はすとは限らない、といふことを注意しなければならぬ。その意味はかうである。學問の手續が充分に緻密であるためには、その學問を理論する個人獨りが道づけた理論——それは無論事物それ自身に即した理論であるべきではあるが——だけでは、また往々にして不充分でありはしないかを人々は恐れるであらう。彼は何物かを見逃し又は氣附かぬ誤りを犯しはせぬかを人々は疑ふに違ひない。人々は文獻を要求する。學問の手續は文獻の跋渉を怠ることを許さない。處で文獻を無視することが異議と曖昧との可能性を暗示すると思はれる限り、なる程文獻の有る無しは誘導性の有無を決定すると考へられるが併し文獻のより本來の性質は、如何にして或る學問を傳承するかといふ傳承性の問題に係はつてゐるのでなければならぬ。さうすれば文獻は、従つて文獻を計上して始めて許される緻密さは、もはや誘導性と本來の關係があるのではないことが判る。であるから方法(手續)の緻密さは必ずしも

誘導性のそれではない。——この緻密さは傳承性のそれでもなければならぬ。事實學問の方法(手續)は文獻の跋涉にあると考へられ得るが、その文獻はもはや學問の誘導性——それから吾々は手續(方法)の概念を導いた——の保證を本來の性質とするのではない。さうではなくして正に學問の傳承性を保證することをその使命とするものである。文獻は先驅者が殘した成果の外の何ものでもない。そして一旦成果の概念に到着するならば、人々がやがて直ぐさま體系概念へ運ばれることは最も自然であつた。吾々はであるから次のことを明らかにすることが出来る。始め體系(成果)と單に對立してゐた方法(手續)の概念は、今や——文獻概念が媒介することによつて——この體系(成果)の概念との交通路を見出した、といふこと。方法(手續)はもはや理論の單なる誘導性のみを意味することは出来ない、それは之を離れて體系(成果)に向ふ virtual velocity を有つ處の何物かを意味しなければならぬことが明らかとなつた。そしてこのことは決して偶然ではなかつたであらう、何となれば元來方法概念も體系概念も同一の教導概念の二つの規定——誘導性と傳承性と——から導かれたのであつたから。

併し私は文獻概念をよりよく注意する必要を有つ。文獻は先驅者の成果であつ

た。そこで先驅者の取つた方法、手續、それ自身が一つの成果として文獻の内容となることがあり得ないか。もし方法、手續が理論の單なる誘導性のみを意味するならば、假にそのやうな方法、手續を成果として傳承したにしても、夫は高々理論の鋭さや奥行きを知り又は學び得るだけであるから、それが文獻の内容となるといふ言葉は云ひ過ぎであるかも知れない。處が吾々は今、方法、手續が理論の單なる誘導性に止ることの出來ない理由を指摘しておいた。それが文獻の内容となり得ないといふ理由は従つて見當らない。そして事實方法、手續概念は或る特殊の變更を経ることによつて文獻の内容となることが出来る。何となれば、先驅者の理論の着眼は、出發の仕方は、問題提出法は、問題の取扱ひは、一口で云ふならば、その考へ方は、吾々が文獻に於て——例へば古典といふ成果として——傳承し得るからである。この時理論の手續は寧ろ理論の考へ方と呼ばれるに應はしいであらう。さうすれば方法概念も亦——それは手續であつた——考へ方の概念となる。そこで吾々は便宜のため考へ方としての方法を手續としての方法から區別することが出来る、後者は理論の單なる誘導性を、之に反して前者は理論の誘導性以上の何ものかを説明する概念である。

吾々は手續——それは理論の誘導性を説明する——としての方法概念と、之から區別された處の考へ方としての方法概念とを得た。前者——それは今まで已に吾々に知られてゐた——がどのやうにして後者へ運動し得たかを重ねて述べる必要はもはやないであらう。

手續から考へ方への方法概念のこの運動は何を意味するか。併し考へ方とは何であつたか。最も直接にはそれは着眼である。着眼は出發の仕方を規定する、出發の仕方は問題の提出の仕方に外ならない。一定の仕方に於て問題が提出される時、その問題の先々の取扱ひ方はその原理に於て已に決定されてゐなければならぬ。或る意味に於てその問題の解決は豫定されてゐるであらう。例へば人間といふ概念を生物學的に問ふならば人間は一つの動物として解決される外はあり得ない。であるから考へ方は實は理論の行く先々の整合を已に豫定してゐるのである外はないであらう。併し整合をそれだけ獨立に取り出して見るならば、それは組織の概念でなければならぬ。そして組織は一つの體系概念——但し此迄の或果としての體系ではない處の——ではないか。方法概念のこの運動は、それ故體系概念への運動に外ならなかつた。事實考へ方としての方法は豫め、その考へ方が組織立てら

れた上で始めて成り立つことが出来るであらう。方法はこの意味に於て常に體系であること考へられることがその必然性を有つ。之は方法概念がそれ自身に於てそれ自身に向ふ處の運動ではある(手續よりも考へ方の方がよりよく方法らしくはな
いか)而もそれは同時に方法概念ならぬ體系概念への運動に外ならない。而も之に
並行して體系概念は益々それ自身へ向つて運動したであらう(成果よりも組織の方
がより多く體系らしくはないか)そしてそれは同時に方法概念への運動に外ならな
いことを人々は類推してよい理由がある。*事實、體系概念——それは組織である——
は、やがて組織するといふ一つの方法概念であると考へられるのが常であるであ
らう。

*哲學に於て優れたる體系は常に一つの方法である。何となれば體系とはこの
場合、モザイクではなくして組織であるからである。例へばフィヒテの *Handlung*
handling の體系を取らう。又優れたる方法は常に一つの體系である。何となれば
ば方法とはこの場合、落想ではなくして考へ方であるからである。例へば現代
の現象學——それは一つの方法 “zur Sachen selbst” である——を取らう。方法
と體系との相互の運動を注意せしめるのはヘーゲルを除いては恐らくコーヘ

ンの哲學である。

〔方法概念と體系概念との運動が相互の否定を媒介する運動であり、従つてその關係が辯證法的であること、又従つて二つの概念は相反對する概念であること、之を方法對象の場合に準じて述べることを私は省いて好いと思ふ。〕

學問性はかくして、一方に於ては已に手續と考へられたに對して今や考へ方としての方法であり、他方に於ては已に成果として考へられたに對して今や組織としての體系である、と解釋せられる。そしてこの二つの概念は相互に否定し合ふことが出来るから、或る時は體系が又或る時は方法が、學問性の性格を云ひ表はすものと考へられる必然性を吾々は見た。第一に前者の場合を吾々はヘーゲルに於て見るこゝが出来らう。「知識は學問としてのみ即ち體系としてのみ現實的である」、「體系なくして哲學することは少しも學問的であることを得ない。」* 普通ヘーゲル哲學に於て最も人々の注意を惹くのは寧ろ方法概念——辯證法——であるのであるが、併しヘーゲル自身にとつては學問性の性格は實は體系に在ると考へられてゐる。何となれば方法とは「内容の内面的自己運動の形式」の意識に外ならないのであつて、認識の内容を顧慮する時「方法自身が體系にまで擴大する」のだからである。**か

くしてヘーゲルに於て事實體系概念が學問性として方法概念を否定するのを吾々
 は見る。處が第二に吾々は他方に於て、方法が學問性の性格として體系を否定する
 と考へられる他の場合を知つてゐる。この場合、體系概念の内には無く、之に反して
 たゞ方法概念の内に於てのみ見出されるやうな、そのやうな或る何かの優れたる學
 問性の性格を、人々は方法概念にぞくせしめることを希望してゐるであらう。例へ
 ばプラグマチズムはその哲學の——寧ろ一般に學問の——學問性を方法概念に於
 てのみ認める。それは何かの特定な成果を主張するのではなくして、單に方法に外
 ならないのであり、その方法を除いては何等の教義を持たない』のである。それは「出
 來上つた體系に背を向ける」***かくて吾々はプラグマチズムに於て體系概念の純粹
 な否定に出逢ふ。處で茲に注意しなければならぬのは、ヘーゲルの場合に於ては、
 體系概念による方法概念の否定は決してこのやうな純粹な否定ではなかつた。と
 いふのは體系は方法を排斥して了ふのではなくして之を包み込んで了ふといふ限
 りに於て之を否定したのであつた。之に反してプラグマチズムにあつては體系概
 念はこのやうな意味に於て單に方法概念によつて否定されるのではなくして、全く
 之によつて排斥されて了ふのである——それは優越されるのでなければならぬ。

然るに吾々は、方法概念が體系概念に對するこのやうな優越を今迄の分析に於ては理解することは出来なかつた。故に今や吾々はこのやうな優越の必然性を方法概念の内から改めて分析し出す必要に逼られて來る。方法概念が體系概念に較べてより多く實踐的であるから、と人々は云ふであらう。それはさうである、けれども體系概念すら、それが教導性の實踐的規定として見出された時、すでに實踐的ではなかつたか。實踐的といふ言葉はその場合々々によつて様々の意味を有つ、或るものに對して實踐的なものも他のものに對しては非實踐的であることを忘れることは、方法概念の分析を——實踐的動機への溯源といふ分析を——恐らく輕薄にするであらう。問題はどのやうな一定の意味に於て方法がこの場合體系に較べてより多く實踐的であると考へられるかに存在する。そこで再び學問性の分析へ還らう。何となれば、方法概念の分析は學問性概念の分析から迂廻して來ることが、その實踐的動機から云つて必然であつたのであるから。

* Hegel, *Phänomenologie des Geistes* (Phil., Bibl. S. 16) 及び *Enzyklopädie* (Phil., Bibl. S. 47)

** 同 *Wissenschaft der Logik* (Phil., Bibl.) 1 Teil S. 35 及び 2 Teil S. 500.

** W. James, *What Pragmatism Means?* 參照。

第 四 部

學問性は之まで普遍妥當性として、教導性として、従つて又手續考へ方なる限りの方法として、或ひは又成果組織なる限りの體系として、理解されて來た。これ等の概念が學問性を規定することを恐らく誰も疑はないに違ひない。併し又同時にこれ等が學問性の可なり皮相な規定であることに誰しも氣附かずにはゐられないであらう。人々は云ふであらう、學問が學問であるためにはなる程今擧げた規定は相當大事であらう、併しそれだけが中心となつて學問が成り立つのではない、寧ろ學問が成り立つために可なり必要な前階としてそれが要求されるに過ぎない、學問そのもの精神はまたその奥にある。即ち吾々の言葉で云ふならば、本來の學問性はかゝる規定を必要とするが、かゝる規定それ自身ではないのである。かゝる規定は、それならば何のために必要であるのか。かゝる學問性——何となればかゝる規定は正に學問性の夫れであつたから——は何故必要であるのか。かゝる問ひに對する答へを含む處の學問性は何であるか。さてこの問ひは、學問性が單に何であるか——概念的規定としては教導性であり實踐的規定としては方法乃至體系である——

ではなくして、學問に於て學問性が何のために要求されるかを問ふ。學問性概念の動機に溯つて學問性の規定を見出すのが今の課題なのである。或る意味に於ける理論的規定を學問性に求めてゐるのでは今はない、さうではなくして或る意味に於ける實踐的規定——何の目的のために學問性が學問にとつて必要であるか——を求めてゐるのである。——その時、學問性は眞理性を獲得する目的のために必要とされる、といふ言葉が許されるであらう。さうすれば學問性は今や學問の手續や考へ方、學問の成果や組織ではなくして、正に學問の眞理性を獲得する處になければならないと考へられる。重ねて云はう、この場合學問性が單に眞理性であるといふのではない、——その場合は後に譲らう——、さうではなくして學問性は眞理性を獲得する——實踐的に——處にあるといふのである。眞理性を獲得するといふ意味に於て、そしてたいこの意味に於てのみ、學問性は眞理性である、といふ言葉が今の場合許されるのである。それは獲得されんとする、又獲得されつゝある、又獲得されたものとしての眞理性である。であるから今の場合の眞理性はそれの實踐的獲得といふ規定を含んだそれであることを忘れてはならない。それであればこそ向の所謂普遍妥當性(従つて又眞理價值)といふ觀念論的規定から區別された實踐的な學問性

の規定でそれはあることが出来るのである。學問性は眞理性の實踐的獲得として規定される。

學問性は眞理性の獲得であると云ふが、併し眞理性の獲得とは具體的には何を指すのであるか。(問題は眞理性の實踐的な獲得であるのだから眞理性に對する觀念論の規定——普遍妥當性・眞理價值——は今の場合一應除いておく)茲に吾々は少くとも解釋の二つの途を事實上知つてゐるのである。第一に眞理性の獲得は問題の解決である。眞理性は與へられた問題を解決することによつて始めて獲得されるのでなければならぬ。もし或る問題を解決し得ないならば、何人も眞理性を獲得したとは信じることが出来ないに相違ない。判つたと思ふことは不可能であるであらう。それ故この學問性は解決にある。或る學問が解決力を持つ限り學問性を持ち、夫を有たない時之を有たないと考へられる。實際何等の解決を齎すことの出来ない學問、その學問の學問性は無に等しいであらう。學問性とは研究を進め課題を解き得る實行力——學問の有用は何よりも先に之でなければならぬ——の外ではないと考へられる。プラグマチズムは學問性——眞理性の獲得——を茲に求めるのである。(之に對して眞理は解決力——有用——の有る無しではなくして

普遍妥當性を有つか有たないかにある、と云つて反對することは、始めから許されてゐない。何となれば茲では眞理性の單なる規定ではなくして眞理性の獲得が問題であつたのだから。さて學問性は眞理性の實踐的獲得に存在し、それが解決の概念であつた。處が方法は體系よりも常に何かの意味に於て實踐的であつたであらう。それ故解決の概念は體系にはなくして正に方法に屬さねばならない。解決は方法概念の内にぞくす。それ故この場合の學問性は方法概念にぞくすのである外はない。かくて茲に於ては——學問性がもはや手續や考へ方、成果や組織ではなくして眞理性の獲得である處では——方法が體系を優越することゝならなければならぬ。學問性概念の動機への分析は一つの新しい方法概念——何となればそれはもはや體系概念との相互の否定を許さない優越なる方法であるから——を吾々は見出したであらう。そして實際プラグマチズムの所謂方法は眞理性獲得の手段の概念である。眞理發見の手段が學問と考へられる。

眞理性獲得の第二の解釋。それは批判と考へられてゐる。といふのは眞理性の獲得はたゞ批判的であることによつてのみ實現されると考へられるであらう。この解釋は第一の夫れに較べてより根柢的であり、従つて動機へより溯源し、従つてよ

り實踐的である。何となれば、眞理性の實踐的獲得は問題の解決である、と云ふばかりに止らず、如何にして問題を解決するか、に答へる用意を有つてゐるからである。批判によつてのみ問題は正當に解決出来る、と考へられる。尤も批判といふ言葉の意味は様々であるであらう。吾々は第一に、或る一定の文化財の先驗的な權利を明らかにし、之を權利づけると共にその權利の限界を示し、かく權限を決定することによつて夫れを基礎づけることを、批判と呼んでゐる。自然科學又は歴史科學に對して、夫々の特殊科學が又は哲學がなす處の批判と呼ばれるものがそれである。併しこの場合、所謂基礎づけを直ちにその文化財の單なる權利づけ——肯定と辯護——とばかり考へてはならない。人々は權利のないものを權利づけることは出来ない、たゞ權利あるものゝみを正當づける外はないであらう。それ故基礎づけは先づ始めに權利の有無を、權利の問題を問うてかゝらなければならぬ。その上で權利あるものへは權利を與へ、權利なきものと認められたものからは之を奪はねばならぬのである。であるから基礎づけとは必ずしも權利の肯定ではなくして又權利の否定をも含む筈である。基礎づけは一般には權利づけではなくして、事物の根柢——之によつて權利が肯定され又は否定される——への探求でなければならぬ。

基礎を檢討すること、地盤を檢察すること、事物を根柢に於て理解すること、之こそ基礎づけである。今の場合の批判は實はこのことを云ひ表はす。批判はまづ第一に根柢の理解である。(同じ根柢に立ちながら、その根柢を理解する代りに、その根柢の上に立つ諸關係を、補綴し辻褃を合はせることは、それ故元來批判といふ名には値ひしない。然るに内在的批判は往々このやうな補綴に外ならないことが指摘され得るであらう。)第二に批判は、たとひそれが自分以外のものに對する批判であるやうに見える時でも、實は自分自らに對する批判としての意味を有つ時に限つて、批判の名に値ひする。蓋し事物はそれ自身の立場に一先づ立つのでなければ批判されることは出来ないであらう。もし始めから外部に立つて事物を見るならば、即ち自身の内はその事物を取り入れることが全く出来ないならば、そこにあるものは批判ではなくして恐らく單なる非難か排斥であるであらう。それ故批判は常に、何かの意味に於ける自分自らに就いての批判である外はない。(文化財の基礎づけは無論カントの理性——それは一つの自分自らである——批判から由來した。)批判は根柢の理解であつたが、この根柢はそれ故自分自身——それが自我であらうとも其他の事物であらうとも——の根柢であるであらう。自分自身の根柢の理解之は反

省である。批判は第二に反省でなければならぬ。人々が自分以外に起こりつゝある諸現象を、自己にとり取れようとする時、批判的であるやうに忠告されるとすれば、そのやうな批判こそ反省の別の名に外ならないであらう。このやうな反省として批判概念は向の第一の規定——根底の理解——に較べてより實踐的な規定——自己自身の根柢の理解——を獲る。かくて批判概念はその根源に於て實は常に自己批判である。さて眞理性の獲得はこのやうな自己批判——學問の又學者の——に外ならないと思はれるといふのである。吾々は又吾々の學問内容は多くの獨斷を有つ。といふ意味はその成立の根柢を充分に反省することなくしてたゞ成立した或る成果だけをそのまゝ尤もなものとして見出し、又之を承認してゐることが吾々の常であるであらう。そしてその根柢を理解せずしてこの獨斷の上に更に研究の層を重ねようとする不斷の傾きを吾々が持つてゐるのも事實である。なる程この時、その手續や考へ方、その成果や組織に於て、そして又課題を兎に角或る程度に於て解決し得るといふ點に於て、これ迄述べられた學問性は充分保證されてゐるであらう。併しさうであるからと云つて吾々は、そのやうな仕方にて眞理性の獲得を安んじて期待出來るとは限らない。一體吾々は根柢そのものに就いての眞理性を獲

得せず、に濟ませてよい筈があるであらうか。茲に自己の批判が要求されるのである。處が第三に、自らの——自己の又は其他の事物の——根柢は之を徹底的に理解する時、——といふのは最後の根柢へまで溯る時——、常に社會的規定の外ではないであらう。そして一應學問性の根柢に達したと考へられる時でも、その時確實であり又或る意味に於て——第一第二の意味に於て——批判的であると考へられたとしても、社會性に接した根柢に於ては、學問性は實は或る一つの遊離状態にあることが發見されるのを常とするであらう。何となれば社會は事實上常に、事物をその根柢から遊離せしめ、そしてかく遊離せしめられた事物へ一應根柢と思はれさうな外見上の固定性を與へるといふ性質を有つ條件を、それ自身に於て具へてゐるからである。社會的規定はこの意味に於て常に虚偽性を有つ——それは眞理性の反對に外ならぬ。處が吾々は今眞理性の實踐的獲得をば學問性——自己批判——の名に於て欲してゐる。故に學問性——自己批判——は、眞理性を實踐的に獲得するため、このやうな虚偽性を、社會的遊離を、破棄して、事物の最後の根柢である社會的規定——それこそ實踐的である——を理解することになければならない。かくて最後に、學問性として批判は社會的規定に對する自己批判となる。第一第二の批判概念

も之を根柢とするのでなければならぬ。

*ベークンの四つの偶像が——批判はかゝる偶像の破壊であるが——孰れも人間の規定から由來してゐるのは、注意に値ひしない程當然であるであらう。處がこのやうな人間の規定は社會的規定によつて代表される。そこで社會に個有な偶像性が吾々の云ふ虚偽性なのである。

このやうな批判概念を以て學問性を規定し盡すことは出來ないが、併し學問性にとつてこの規定程重大なものを見出すとは出來ないであらう。その外觀、その形骸に於て學問らしく見えるものもこの規定をたゞ一つ缺く時、それは學問性の精神を全く有たないものと考へられるであらう。(曲學の概念は茲に生れる)唯名上の學問を具へてゐる廉を以て學問らしい威容を有つて俗流と一致すべく通用する没批判的理論を吾々は常に眼にしないであらうか。事實諸々の問題を解決し得る有力な理論でさへも直ぐ様學問性を有つと想像することを吾々は控えねばならない。何となれば一旦提出された問題は如何なる根柢の上に於いても、その根柢の批判とは無關係に必ず一應は解かれ得る性質を有つてゐるからである。そして序に學殖博學なる知識、それ自らだけでは之は元來學問性概念とは一應別であつたのである。

——前を見よ。學問性を有つことが出来ないことを述べる必要があるであらうか。たゞ社會的規定に對するこの批判性に於てのみ、眞理性のこの獲得に於てのみ、眞理の所謂價值といふ言葉も純粹な意味を受け取ることが出來、そしてかゝる眞理性の獲得によつてのみ、この學問性によつてのみ、學問の所謂自由といふ言葉も唯名的性質を脱することが出來るであらう。(學問に於ける自由——それこそ學問性である——は何か「強制の缺落状態」といふやうなものであるのではなくして、批判的氣魄の存在であらねばならぬ。)學問の所謂神聖は茲に於てこそ始めて保證されるのである。かくてこのやうに根柢的な批判性に於て學問性は夫れのもつ眞に實踐的な規定を始めて示すことが出來る。何となれば社會的規定こそは眞に實踐的な規定であるであらうから。——さてさうすれば、このやうな學問性——根柢的批判性——は方法に屬すかそれとも又體系にぞくすか。かゝる批判は體系の有つ名ではなくして方法の有つ名でなければならぬのである。批判的體系はあるにしても、もしも批判がこのやうな意味での——根柢的な——批判であるならば、批判といふ體系、とふ言葉は事實上意味を有つことは出來ないに違ひない。批判は方法概念にぞくす。批判が實踐的な——社會的規定に對する——批判であり、又方法が元來實踐的

概念であつたのであるから、之は至極當然でなければならぬ。そしてこの方法こそが始めて眞理性獲得の手段——それはプラグマチズムの場合の方法概念であつた——でなければならぬであらう。何となれば根柢的批判的方法に於てのみ、この問題も解決されるべき正當な仕方に於て解決される見込みが始めて立つのだからである。故に吾々は方法概念がこの點に於て體系概念を優越する必然性を今や知ることが出來た。學問性そのものとしての批判概念に於て、學問の方法概念はその中樞的な規定に出逢ふ。

* 古典に於て——それはヘーゲルに就いて最も著しい——その學問の體系ではなくして正に方法が學ばねばならないと考へられる理由が、茲にその必然性を享ける。而も特に方法が學ばねばならないと考へられるのは批判的であらうためであつた。それ故手法の末流的傳承は方法を學ぶ目的とは相容れない。所謂批判主義の傳承が必ずしも批判的でないことは屢々注意されてゐるであらう。

私は方法概念に關する最後の問題を取り上げる機會に來た。學問の方法は學問

の社會的規定に對する自己批判である場合を向に述べた。處が學問のこの社會性——實踐性——はやがて學問全體がその自身として社會に對して持つ關係を要求して來ることが自然であるであらう。意味はかうである。今迄の處では學問が内部に於て持つ社會的規定を取り扱つた、今やそれはおのづから、學問がその外部に於て持つ社會的規定を取り扱はねばならなくなつて來るであらう、そして外部に於て持つ社會的規定、それが學問が社會に對する關係を指す。その理由はかうである。學問の學問性はその批判的方法にあつた。處で人々の實踐生活——それが社會である——は批判的であることを最も屢々その理想とするであらう。吾々が生活意識を明白にするとは恐らく之を指すことになるであらうからである。さうすれば生活の理想は充分に批判的であることになるから、即ち批判的方法による生活であることになるから、恰もこの批判的方法である學問性がその在り方(Wesenheit)である處の學問は、生活の理想でなければならぬと考へられるのは、至極自然であるであらう。さうすれば學問それ自身が生活の典型的な仕方を云ひ表はすものでなければならなくなる。茲に學問は生活の方法となる。もはや學問が學問性として持つ處の方法——批判——であるには止らずして、學問それ自身が生活に對して、社會・實

踐的世界に對して、その方法とならねばならない。學問は生活法となる。學問の方法といふ概念は今や單に學問ではなくして、一般に、生活の方法といふ概念となる。かくて學問に關する方法概念は生活の方法の概念としてその最後の位置に就くのである。^{*}このやうな事情はもし學問性が體系であつて方法でなかつたとしたならば起こり得なかつたであらう。茲に方法概念の實踐的優位が見紛ふことを許さぬやうに顯はれる。

^{*}このやうな場合の代表的なものを吾々は已にギリシヤに於て知つてゐる。生活法としての學問は、従つて又その學問のそのやうな學問性は、中にもプラトンに於て最もよく意識される。プラトンに於ては學問性が、之に對してアリストテレースに於ては寧ろ學問の方法が、主として問題となつた。

(思ふに現代の最も著しい特色の一つは生活の學問性が強調されて來たことにあるであらう。生活の指導原理は今や、デミュートではなくして正に學問的(又科學的)であることになければならないと考へられてゐる。人々は之を主知的であらうがための合理主義的啓蒙主義的傾向と混同してはならない。今日の學問性は主知的であらうがためではなくして却つて恰も實踐的であらうがためのそれなのである

から。實踐生活の方法として時代は學問を要求しつゝあるであらう。このやうな傾向が何故可能でなければならぬかといふ必然性を、今吾々は見た。今見たこの必然性に従つてこの學問の學問性はもはや對象の高貴や體系の莊麗であることに満足するを得ずに、恰も方法の批判性にまで徹底しなければならぬ筈であつた。事實要求されつゝある學問性は生活の原理生活方法としての社會的自己批判でなければならぬ。このやうな自己批判としての學問性は學殖の崇拜や教育又は功利への關心からは發生しないであらう。恰もこの意味に於て、そして又言葉の純粹な意味に於て、現代の學問性は哲學的であつて詭辯的ではない。

もし吾々の課題の形態が方法概念の分析ではなくして、之と直接に關係はするが併し概念としては無論之と一つではない處の學問性概念の分析であつたならば、恐らく第一に次のことを注意する必要があるであらう。學問性は眞理性の獲得として規定されたが、それは學問が眞理を云ひ表はすものに外ならないと考へられるからでなければならぬ。さうすれば學問性は眞理性と一つに考へられる筈のものである外はないやうである。處が眞理性の概念は、その眞理に到る方法とか、その

眞理を敘述する體系とかいふ概念を以ては、中樞的に把握出来ない處の一つの個有な規定を有つてゐることを人々は氣附くに違ひない。この規定の最も代表的な表現は深さの感覺——*Tiefinn*——である。眞理性が深さにあるとすれば、學問性が眞理性と等置されたからには、學問性も亦深さをその最も深い規定としなければならぬ。さうすると、現に方法は學問性の根本的な規定であることゝなるであらう。これを止めねばならぬ。この結果はなる程方法概念が體系概念に對して有つた一應の優越を必ずしも破りはしないかも知れない、併し吾々が得た方法概念の優れたる性格——學問性の性格、又従つて生活原理——は失はれる。かくて實際、方法概念の分析の興味は重大な損失を受けるであらう。終りに臨んでこの不滿を處理しておかなければならない。

或る意味に於て學問性は眞理性である。併し眞理性必ずしも學問性ではない。といふのは人々は獨り學問の眞理をばかりではなく宗教的體驗の又藝術的感覺の人間の性格の眞理を語るであらう。かゝる眞理は學問の眞理とは別であると云ふか。さうすれば學問性は特に學問的眞理性であるのであらう。又かゝる眞理は學問宗教藝術道德一切に普遍であるといふのか。それは眞理性必ずしも學問性では

ないといふ向の言葉を裏書するものである。この場合もしこの言葉を否定しよう
と欲するならば、人々は學問と他の營みとの區別をも否定しなければならなくなる
であらう、さうすれば學問性といふ概念それ自身が無意味となる。何となれば、凡そ
他の概念と區別され得ないものは一定の概念として成立する動機を有つことが出
來ないから。かくて眞理性必ずしも學問性ではない、たゞ學問的眞理性のみが學問
性であるのである。そこで學問的眞理性と學問的でない眞理性とを區別するもの
は眞理性であることは出來ない、無論それが學問性であるのである。學問性は眞理
性の獲得であつた、その意味に於て學問性は眞理性ではある、眞理性一般に屬するの
ではある。が如何にしてその眞理性を獲得するかといふ點に於て、その方法に於て、
學問性は他の營みから自らを區別する。そしてたゞ學問的方法のみが學問性を保
證する。學問性はそれ故是非方法にあらねばならない筈である。

併し深さの感覺はこの場合どう處理されるか。深さは眞理性の一つの根本規定
であつた。従つて又學問性の根本的規定でなければならぬと考へられる。それ
は誤りではないであらう。併しながら深さは獨り學問的眞理に特有な規定である
のではない、寧ろそれは元來宗教的眞理概念から發生した概念であるであらう。さ

うすれば深さは學問性に、特有な規定ではない——實際學問に於ては特に往々深さが非難されるのを人々は知つてゐる。それに特有でない規定を以て或る概念を規定しようとする時、人々は一方に於て正しさを得ると同時に他方に於て誤りを犯すであらう。深さを以て學問性を規定しようとするれば、人々は一方に於て、學問が學問的方法によつて眞理性を獲得する時深さを獲得するであらう、といふ主張に於て至極正しくあると同時に、又人々は他方に於て、學問がたゞ單に直接に深くあらうと志すことによつて眞理性を獲得し得るであらう、といふ主張に於て誤つてゐるのである。思ふに、深きものを透明に表はすことこそ深さであり、之に反して深くないものを深さうに表はすことは却つて一つの淺さに外ならない。學問的方法によつて得た結果が深くあり得ることは望ましいことではなければならぬ(深さを辯護する人々は茲に於て正當である)。併し單に深くあらうと志すことを以て學問性が成立すると思ふならば夫は笑ふべきである(嚴正を求め深さを非難する人々は茲に於て正しい)。*吾々はこの二つの場合の混同を最も警戒しなければならぬ。前の場合は學問性を眞理性の獲得として見るのではなくして、すでに所有された眞理性として考へる場合であり、後の場合は學問性が現に獲得しようとするものとしての眞理

性を考へてゐる場合である。故に、もし今單に觀念的——觀念的の意味は前を見よ——真理概念の分析に満足するならば、學問性の根本規定はまづ何よりも先に深さでなければならぬであらう。之に反してこの眞理性を如何にして獲得するかといふ實踐的な眞理概念——それが學問性であつた——の分析を必要とするならば、學問性の根本規定は深さではなくして正に方法でなければならぬ。そして吾々は始めから——方法概念の實踐的動機を溯る吾々は——常に實踐的概念の分析を要求してゐた。故に吾々にとつて學問性は再び是非とも方法になければならぬことが證明される。

* 深さと嚴正とを對決せしめたものは例へばフッサールのデイルタイに對する批評である。併し吾々にとつては、批難されるべきものは深さそのものではなくして非方法的な深さである。そして又「嚴正なる方法のみが唯一の方法であるとも考へられぬ」。(Husserl, *Philosophie als strenge Wissenschaft*.)

私は學問性概念の分析を借りることによつて、學問の範圍にぞくす方法概念を分析して見た。(尤も學問概念の分析を課題とはしなかつたからして、學問性概念の分

析はたゞさし當り必要な限りに於て行はれた。これより先第一部方法^は對象^に對立した。そして方法はその實踐性の故に對象を優越した第二部。今度は方法概念の實踐的動機を追求することによつて、學問性概念に溯り、その分析に於て、學問性として、方法が體系に對立するのを吾々は見た(第三部)。そして方法は再びその實踐性の故に、但し今度は學問性概念を媒介しての實踐性故に、體系を優越する、そしてこの優越な學問性が生活法となる場合に於てその最も著しい實例を見出した(第四部)。

——さてこのやうなものが學問性に於ける方法概念の運動でなければならぬ。

この概念の、この運動の、分析が、たゞ實踐的世界の構造——それは存在論的である——からのみ始まり、そして又之に於てのみ終つたことを、茲に附け加へておかう。

分析の結果得ることの出來た一般的な結論はそれ故次のことである。方法^は學問の根本的な性格——學問性——を云ひ表はす。學問が單に觀念的概念に安住することが出來ず更に實踐的概念にまでならなければならぬとすれば——そして夫を吾々は絶對に要求する——、學問概念の性格は方法である。(終。一九二八・六一)